

歴史を語る建物たち

庄内編
(第2回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

(株)庄内測量設計舎 (庄内町)



庄内町役場の近く、庄内町立図書館の向かいに、昔の木造校舎を思わせる建物がある。入り口には「株式会社 庄内測量設計舎」という看板がかかっている。気になって同社に尋ねたところ、案の定、戦前に建てられた旧大和小学校を解体して移築した社屋であった。そこで、早速取材を申し入れて話を聞くことにした。

天皇陛下のご生誕日に竣工した

『大和郷土史』によると、明治22年の町村制実施で発足した旧大和村（旧余目町を経て現在は庄内町）には、古閑と廻館という大きな集落が2つあり、それぞれに尋常小学校があった。ただ、児童数600~700人の村で、1村に2つの小学校を持つことは、教育効果の面でも財政面でも、さらには村の一体感を培う上でも問題だとして、両校の統合はかなり早い時期から有識者の間で議論されてきた。

しかし、両集落の対抗意識は相当なもので、村会では常に意見が分かれ、時には集落による両校児童の登校停止にまで発展した。ようやく事態が収拾した昭和8年に両校の統合が決まり、新進の建築家である高梨

四郎が、旧大和小学校の設計にあたった。高梨四郎は、一級建築士の資格を早くから取得し、山形県建築士会の初代会長を務めるなど、建築界で活躍する一方、県会議員や、「昭和の大合併」で誕生した旧余目町の2代目町長を務めるなど、政治の世界でも活躍した人物である。

新校舎の竣工式は昭和8年12月23日に行われたが、折しもその日は皇太子（現・天皇陛下）のご生誕日



竣工日当日の大和小学校新校舎。同日の皇太子（現・天皇陛下）ご誕生に沸き返った。
出典：『教学百年 大和の学校』（記念誌編集委員会）

あった。竣工式では、「皇太子と同じ日に生まれた学校」として、統合まで幾多の苦難を経験した村民も和気あいあいとした雰囲気だったという。

廃校と社屋移転が偶然に重なった

昭和52年3月に、旧大和小学校は旧十六合小学校と統合し、新たに旧余目町立第四小学校（現・庄内町立余目第四小学校）が発足した。廃校となった旧大和小学校はいったん農協が買い取って倉庫として利用していたが、やがて不要となったので旧校舎を解体することになった。

一方、昭和41年に設立された庄内測量設計舎は、手狭になった社屋の移転を検討していた。旧大和小学校で学んだ創業者の富樫清社長（現・相談役）は、設計者である高梨四郎の勧めもあり、旧大和小学校の校舎の一部を解体して現在地に移築し、新社屋としてスタートした。昭和61年1月のことである。

清相談役は、「高梨さんに勧められなかったら普通のコンクリート社屋を建てていたかもしれません」と話すが、同じく旧大和小学校で学んだ息子の富樫仁社長は、「父も、自分が学んだ校舎を移築して今の社屋とすることに強い意欲を持っていたと思います。廃校舎の移築には、私も含め反対する社員はいませんでした」と、当時を振り返る。

ただ、旧校舎の設計図がなかったため、移築には困難を伴った。そこで、解体の際には壁や柱など1つ1つの建材に番号を振り、2か所にあった階段を社屋の構造上の利便性から逆にした以外は、ほぼ忠実に移築した。また、傷ついた柱にもカンナをかけず、そのまま使用した。さらに、廊下に増設した棚なども、旧校舎の雰囲気になじむような作りをする徹底ぶりであった。取材した筆者が「この棚も移築時に運んだものですか?」と尋ねたほどである。

強固な土台で耐震性も抜群

仁社長の話では、移築が完了した現社屋には、旧大和小学校の卒業生が訪れては、「よくぞ残してくれた」と感謝の言葉を残していくという。ただ、「社屋の一室で小学校の同窓会を行いたい」という申し出には、さすがに「社員の仕事に支障が出るから」と断ったそうだ。旧大和小学校時代には、地域の集まりや映画の上映会が行われるなど、校舎はコミュニティーの場としての役割も持っていた。その名残ならではのエピソードだろう。

ところで、清相談役は、創業前は旧余目町役場の職員であった。昭和39年、マグニチュード7.5の新潟地震が起きると、1年後の昭和40年、現地視察に訪れた。そして、信濃川の旧河道など、地盤の軟弱なところで被害が大きかった現状を目の当たりにした。そこで、もともと田んぼだった現社屋の敷地に廃校舎を移築す

る前に、コンクリートパイルという、建物の基礎としてビルやマンションなどを支える役目を担う建築資材を地盤中に埋め込み、土台を強固にした。「当時は庄内地域でも大変珍しい工法でした。実は高梨さんからは『必要ない』と言われたのですが、新潟地震の教訓があったので工事を行いました」と清相談役は語る。おかげで、先の東日本大震災でも、補修が必要な建物の被害はなかったという。

「1000年は使えますよ」

仁社長が、「この旧校舎は、地元の良質な杉を使った貴重な建物です」と評価すれば、清相談役は、「良質な材木は、使い方を誤らなければ樹齢の10倍は長持ちするといわれています。ですから、100年杉が多く用いられたこの建物は、手入れさえしっかりと怠らなければ、1000年は使えますよ」と強調する。確かに、例えば極端だが、世界最古の木造建築物群である奈良の法隆寺は今から1300年以上前の建立だ。

「建物の維持管理は大変です。今年も大きな補修をしました。ただ、何もしなければすべて解体されただろう旧校舎の一部を、こうして移築したことは良かったと思います。ほらっ、天井が高いから全然圧迫感がないでしょう?」と、誇らしげに語る仁社長。そういえば、お茶を出してくれた社員の方も、「こういう建物で働くことはどうですか?」という取材者の問いかけに、「とても開放感があります」と答えてくれた。

昭和初期の木造校舎は、まだ日本が本格的な戦時体制に突入していない時期ということもあって、作りがしっかりしているものが多い。それらが廃校になって無造作に壊されることは珍しくない。地元銀行から「優良企業」と称される同社がこうして廃校舎の一部を社屋として再利用するのは、ある種の“ノブレス・オブリージュ”（地位ある者の務め）といえるのかもしれない。

(東北公益文科大学特任講師・山口泰史)



階段の手すりにある突起は、児童がすべり台にして遊ばないように取り付けられた（写真は富樫仁社長）。
写真提供：松山薫 東北公益文科大学准教授